

「大平宿・・集団移住の集落の保存運動へのアプローチ」

第二文学部 社会人間系専修 3年 北沢 貴

---

目次

- レポートのねらい
- 大平宿の概説
- 大平史・・部落のはじまりから集団移住まで
- 大平宿保存運動の概説
- 考察
- 参考文献
- 資料 長野県地図と大平宿近辺の地図

---

レポートのねらい

この課題の最大の目標は、飯田市民として飯田市の郷土財産、文化遺産である大平宿に関して理解を深めることである。一通りの理解を深めた上で、社会学的な論点を見出し、考察を述べ、演習の課題研究の枠を越えて発展させていきたいと思う。

大平宿をテーマにするにあたって、このテーマを選んだ理由は大きく二つある。一つ目は僕自身が飯田市民であるということ、二つ目は大平宿に関する出版物というのとは一番新しいものでも僕の生まれる前であり、大平宿に関する最近の社会学的な考察というのとは飯田市立図書館で調べた限りでは見当たらないからである。しかし、大平宿と同じような歴史をたどった宿場町というのとは日本の各地方に点在している。大平宿の研究と並行して比較対照しながら新たな論点や発見をできるように努めたい。

大平宿（大平部落）の概説

長野県飯田市の山中に現存する大平宿（大平部落）は平安時代末期に開通したといわれている大平街道（現在の旧大平街道）沿いに存在している。飯田市からの飯田峠と木曾からの木曾峠の間の大平高原に江戸時代半ば頃から発展した。

明治末期には中央線（名古屋 長野）開通にともない、長野県南部へ流通の主要コースとしてにぎわった。

しかし、昭和初期に伊那谷に伊那電気鉄道（現 JR 飯田線）が開通し、東京・名古屋方面からの流通は大平街道から伊那電気鉄道へ移った。さらに燃料革命（石炭、木炭から化石燃料への変換）による林業の衰退などで過疎化が進み、昭和 45 年（1970）11 月に住民の集団移住により廃村となった。

## 大平史・・部落のはじまりから集団移住まで

### 1) 大平古道・・無人の大平高原

大平高原は、長野県南部に広がる木曽谷と伊那谷を分ける木曽山脈山中、主峰駒ヶ岳より南に低くなってきた飯田市側からの飯田峠と木曽側からの大平峠の間の標高 1,170mにある。その開発のはじまりは江戸時代・宝暦の頃（およそ 1750 年）といわれる。

古代において中央大和の朝廷から信濃の国及び信濃以東の国々への主要交通路は全国で最高の峠道であった、美濃・信濃の国境、神の御坂（神坂峠）（恵那山 1,595m）を越え、阿智（長野県下伊那郡阿智村）に下る東山道であった。「続日本紀」大宝二年（702）には、この道を正式な官道として駅制が実施されたことが記されている。

大平を通っている大平街道は東山道には含まれていない。しかし、鎌倉時代以降、山岳信仰が盛んになり、木曽の御嶽山、伊那の白山権現の開創があって以後は木曽路と伊那路を最短で結ぶ大平街道を使うようになった。しかし、大平街道が流通や交通の要衝となることはなく、人々は東山道を使いつづけていた。また、大平街道がどのようにして、いつ頃からできたのかは文献には載っていない。誰が何のために作ったかも不明とされている。

### 2) 大平の開発・・木地師と穀商人

文章記録では、大平の開拓の始まりは約 250 年前、江戸時代の宝暦年間で、木地師の大蔵五平治が入り住んだことが始まりとされている。大蔵の一族は先祖代々諸国の木地師の免許状を有し、大蔵五平治は飯田市の育ちであった。五平治は飯田の穀商人の山田屋新七とともに大平開墾を決意した。飯田藩、江戸幕府から開墾許可をもらい、ここから大平高原に大平宿の足がかりが誕生した。

大平宿は五平治と新七という二人の人間が自らの生業を発展させるために山に入り込んで開拓をすすめたことが始まりである。まず、木地師の五平治が妻子とともに大平高原へ移住した。

宝暦四年（1754）、新七は妻子を引き連れて大平に登り、五平治の家族と共に開墾に着手した。このとき、二人の勧誘で木曽方面から五戸の家族も加わり、百姓 7 戸が無休で開墾を進め、余暇には街道の改修工事を行うなどした。しかし、夏はイノシシや鹿に畑をことごとく荒らされ、冬には高冷地の厳しい気候と豪雪にみまわれるという過酷な環境であった。冬場には農作物の収穫が見込めないため、罾や落とし穴を仕掛けたり、猟銃を使うなどして狩猟をしていた。大平宿には今でも落とし穴の形跡が山の至る場所に残っている。

翌年の宝暦五年には開拓者家族は各々の定住の家を建てて、ここで大平に初めて部落という集団ができたといえる。

さらに翌年には大平に上水路が藩の資金により建設された。

### 3) 大平の発展・・最初の移住者

大平部落の基礎ができ、藩による大平街道の改修と部落民の協力もあって、木曾の妻籠宿に抜ける街道が幅 1.8 メートルに改修された。大平高原の原野は開墾されて畑となった。しかし気候は北海道の札幌あたりとほとんど類似した高冷地であり、人々は農耕のみでは生活ができず、生業は山仕事であったとされる。副業として木地師、編笠作りをし、長い積雪の冬の時期を越すには山猟が重要であった。

住民の世代は二代目に移った。この頃から、開拓当時から最大の障害でもあった山の厳しい気候条件が部落全体の生計を圧迫し始めてきた。住民は安永六年（1777）に藩に対して大平における木地屋の税を免除してもらうよう願書を出した。翌年 11 月、冬の始まりに藩はこの願書を受け入れることを決定した。

開拓から 27 年経った天明元年（1781）には大平部落の個数は二十二戸を数えたが、開拓者の一人山田屋新七の長男新七（襲名）死去にともない、その家族は貧困に耐えかねて大平を捨てて飯田に戻った。大平部落ではじめての移住者は開拓者の家族であった。

#### 4) 大平宿の発展・宿場町として足がかり

木曾谷を抜ける木曾街道には福島に関所があり、箱根・新井と共に天下の三関を言われ、特に「出女入鉄砲」の監督は厳しかった。そのため、木曾街道を避けて、大平街道を通過するというルートが繁盛する。また、諸事情により藩からの命令で大平街道を通る旅人が大平宿への滞留を命ぜられることもしばしばあった。こうして、宿場町としての様相を呈してきた。

時の流れと共に、大平街道を通る旅人は増えてきた。「東海道中膝栗毛」の作者・十返舎一九は飯田を訪ねた際、木曾に抜けるのに大平峠を使ったといわれる。庶民の往来では、善光寺・元善光寺参りや伊勢参りもあり、名古屋方面・京阪方面よりの様々な旅人が大平を通ることとなった。街道沿いに定住していた移住者は旅宿や茶店を営むようになり、馬籠・妻籠と同じような宿場町に発展して行った。文化十四年（1817）ころ大平宿は宿場町として盛況をむかえ、文政、天保と栄えていった。N\_n...chie1225

#### 5) 試練の大平・大平の自給力不足

天保七年（1836）から四年間にわたって大平に秋から冬にかけて大寒波が続いた。この影響で数少ない大平の農産物（主にそば麦や煙草）に多大な被害を与えた。以来大平ではこの両作物に変わって馬鈴薯の栽培をはじめた。さらに、四年間続いた寒波は飯田市全体の米の凶作とそれに伴う米の価格高騰を引き起こした。（ちなみに、翌年の天保八年には大阪で大塩平八郎の乱が起きている。）

大平には水田がない。過去にさまざまな品種の稲を持ち込んだが、大平の短い夏と一年中冷たい水では稲作はできなかった。

飯田市の凶作と農作物の値段高騰、この二重の被害は大平にとって命取りとなり、文字通りの全戸困窮という状況になった。さらに、飯田市では穀屋つぶしが横行するなど、大

平に追い討ちをかける事態も頻発した。

凶作年の中で大平にとって思わぬ幸運もあった。寒波による豪雪は豊富な水源となって、春には筍の豊作をもたらし、最悪の事態は免れた。

この凶作の時代を戒めとして、大平宿では稲作を導入することを決めた。高冷地の御嶽山で自生している稲や寒冷地に適する種を探すが、再度失敗に終わる。

安政三年（1856）には大平宿は宿場町として最盛期に向かい、人口は全 28 戸 180 人となっていた。時代は明治維新をむかえ、江戸幕府の終焉を迎えると共に時代は明治へと変わっていった。

#### 6) 明治の大平・・・全盛期への発展

明治五年（1872）に政府から学制が頒布され、大平では翌年に最初で最後になる小八区大平第三番小学正道学校（後に丸山小学校大平分校と改名）が誕生した。この時、大平には 39 戸であった。翌年の明治六年には 47 戸となっていた。

明治二十九年（1896）には大平郵便局が設置された。長野県南部と都市との交通、流通、情報はほとんどが大平宿を経由することとなり、大平宿は重要性を高めていった。

明治三十六年（1903）大平の小学校の生徒数は 90 名を超えた。

明治三十七年（1904）大平の重要性を行政は重く受け止め、大平街道を県道大平線としてさらなる発展を期待した。

#### 7) 大正の大平・・・全盛時代

明治四十二年に中央線（名古屋～松本）が全線開通する一方、伊那谷を通る飯田線（当時・伊那電鉄線）の南下が遅れていた。このため、大正時代には東京・京阪からの伊那谷への旅客や貨物はほとんど名古屋を経て、木曾から大平街道を経由して伊那谷に入った。

大正九年（1920）にはそれまでの人力車や自転車・運送馬車に代わって大平自動車株式会社による、大平経由の飯田・木曾線の定期バスの運行が始まる。1 日三回発着であった。交通の便や往来の発達に伴って伊那地方の小中学生の修学旅行はほとんどが大平街道を使つての奈良、大阪方面となった。

大平は伊那谷の流通の拠点となり、宿場町にはさまざまな人が足を止め、大平郵便局の存在と役割は重要さを増していった。それと同時に大平部落は 75 戸を数え、明治から大正にかけて全盛時代を現出した。

#### 8) 昭和の大平・・・集団移住への歩み

集団移住へのきっかけとしてはじめに大平の地勢、産業についてまとめてみる。大平宿は海拔 1170 メートル中央アルプスの高冷地にあって飯田の市街地から 20 キロを隔たる大平街道の要衝の宿場部落として発展してきた。旅籠以外の生業として、山林や蚕、薪炭などが栄えた。

昭和に入ると飯田線や中央線（東京・松本間）の開通や国道、県道の整備が長野県南部に行きどいた。物資の流通、交通は全て鉄道が担うようになり、人の足も自然と大平街道から離れていき、宿場の存続は次第に困難な事情になっていった。また、燃料革命により、部落民の大部分が従事してきた薪炭生産も需要の激減により収入は著しく減り、住民の収入は山林業のみとなっていった。高冷地であり、酷寒多雨という厳しい気象条件は作物や動物の飼育ができないという悪条件からも部落は経済的な危機にさらされてきた。

このような事情もあり、まず昭和 32 年に大平郵便局が廃止となった。部落の若者たちはしだいに故郷を離れて県内外に職を求め大平を離れて行き、住民の中には市街地や県外に転出するものなどが増え、昭和 35 年（1960）になると、戸数は全盛期の約半分の 38 戸 176 名まで減った。

地域住民の減少に伴い、小学校（丸山小学校大平分校）の入学児童数も激減した。昭和 45 年度 2 名、翌年は 1 名で昭和 46 年以降、新入生はいない。

住民の転出と厳しい自然環境のため、部落内の畑地の総面積は最盛期の半分以下となり、自給自足の生活をするのが精一杯となる。移住者も後を絶たず、多数の無住家屋とともに過疎地となっていった。

昭和 45 年になると、部落内で協議を重ね、部落民の総意として集団移住を決定した。同年の 3 月 9 日に集団移住の請願書を提出。飯田市で設置された大平移住問題対策特別委員会は一日も早い移住を得策とみなし、移住民全戸の移住後の居住地と転職先の斡旋を推進することを決定した。こうして昭和 45 年 11 月 30 日を持って、約 250 年続いた大平部落は全住民の移住が終了し解散となった。

集団移住の時には大平部落には 28 戸が存在し、移住先として現・飯田市へ 20 戸、市外へ 2 戸、岐阜県と愛知県へそれぞれ二戸、大阪と埼玉へ一戸となった。

## 大平宿保存運動の概説

### 1) 保存運動のはじまり

昭和 45 年の集団移住から 3 年後の昭和 48 年に中京の開発業者が大平部落での別荘開発と会員制の民宿経営に向けて動き出した。これに対し、飯田市の登山者を中心とする市民有志が観光地開発に反発する姿勢で動き出した。主な理由として、大平の自然保護、大平宿の保護、大平と飯田市の間にある貴重な湧き水および飯田市全体の生活用水の水質汚染を恐れたためである。

### 2) 保存運動団体の誕生

こうして、最初に昭和 48 年 7 月に「摺古木<sup>すりこぎ</sup>と大平を語る会」が誕生し、8 月には元住民を含む 24 人が集まり、名称を「大平の自然と文化を守る会」とした。開発計画自体は多方面からの反発や、過去の大平別荘地計画の失敗例、そして何よりオイルショックの影響で

会社が倒産したために中止となった。守る会の当初の目標は果たされ、活動内容は学習と啓蒙となった。そして、その月のうちに保存活動の実践集団として「満寿屋会」を結成、名前の由来は大平宿にかつて存在した旅籠からきている。

満寿屋会は当初の目標として集団移住以降 3 年にわたって放置されてきた無住の家に足を踏み入れ、登山者や愛好家、修学旅行生たちが活用できるように管理し保存していこうとすることであった。

### 3) 保存活動の開始と発展

満寿屋会はまず満寿屋、大蔵屋、下紙屋を所有者から借り受けて雨漏り、落壁の補修を大掃除と並行して行った。保存活動の範囲は徐々に広まり、大平の民家にまでおよび、昭和 51 年に「満寿屋会」は現在の「大平をのこす会」へと名前を変えた。

のこす会の基本方針は行政への要望活動であった。主な要望としては大平を取り巻く摺古木自然園（山地）の設計変更、民家、集落と自然を一体のものとして行政が保存参加をするなどであった。保存活動に専門家やジャーナリストも参加するようになり、保存活動が知られていくに従って行政側も対応する姿勢を持ち始めた。

こういった外部との連携は保存運動の質とスケールを高め、昭和 54 年には全国歴史的風土保存連盟・全国町並み保存連盟に加盟した。さらに、観光資源保護財団と連携して活動を強化していった。昭和 56 年には東京に「大平を語る会」が結成された。

一方、同じく昭和 56 年には「飯田市長との懇談会」を契機に行政との関わりが急速に深まった。大平保存に向けて市の方針も明確になり、昭和 57 年には「大平保存再生協議会」が発足した。この会では地権者、のこす会、専門家などによる協議が実現した。以後、飯田市による「大平憲章」の制定、昭和 59 年に飯田市による自然環境保全地区指定など、大平保護運動は大成を遂げたといえる。のこす会は現在でも活動をつづけ、行政と一体となって今後も大平保全に力を注いでいく方針である。

### 4) 現在の「大平をのこす会」

宿泊で大平宿の満寿屋を利用する場合は一人 300 円、日帰りで利用する場合は 100 円を飯田市内にある「大平をのこす会」事務所に納めてから鍵を受け取り、利用することができる。設備は昔のままで、壁には「不便である点はむしろよろこびとし、すすんで古いよさを活かした生活をするよう心がけること」という心得書が壁に貼ってある。

大平宿の利用期間は主に初夏から秋にかけてである。冬の間や、街道に雪が残る春遅くまでは通行止めとなっている。夏から秋にかけてはキャンプ、釣り、天体観測、山菜狩り、紅葉狩りなど、全ての年齢層と様々な団体が利用している。

なお、大平をのこす会のメンバーは毎年冬になると一般には積雪で閉鎖された大平街道に入り、現存する全ての民家の雪下ろし作業を行っている。

## 5) 大平宿保存運動の基本概念

1989年3月に発行された羅赤嶺 6で、持地邦太郎氏は大平宿保存運動を日本各地で起きている過疎化地区の保存運動の成功例であるとともに手本になると述べている。氏は日本各地の街道沿いの過疎化地区、主に宿場町、を訪れ保存活動の様相などを観察してきた。大平宿の隣の宿場町であり、有名な中山道の妻籠宿と比較してみても保存活動の基本理念というのはまったく違ってきている。

観光地としての発展を第一と考える妻籠宿は徹底して観光客や観光バスの誘致をし、それに伴い旧街道の舗装や石畳の撤去、観光客の便利を考えての電化や町全体の近代化改修をしている。いわば、テーマパーク化とも言えるような宿場町の徹底した産業化を目指している。

大平宿はというと対照的な保存活動をしている。「生活原体験の場」を掲げ、訪れた人に集団移住をした当時のままの風景と生活環境をそのまま提供していく。家屋も昔のままを再現、維持し、県道の大平街道以外の宿場町の道路は舗装もしていない。観光ツアーなどはなく、知る人ぞ知るといった感じである。

### 考察と反省・今後に向けて

夏季レポートの課題から引き続いて、大平宿を扱ってきた。その際、主な視点というのは大平の歴史を調べ、そこに何らかの社会学的な問題点や興味を見出し、自分なりに大平について語るということだった。特に注目していたのは、過疎化をたどり集団移住へと向かった原因だった。しかし、その点に関して言えば、夏季レポートを書き上げている途中で、部落の経済を支える経済基盤の欠如が主な原因であることには安易に気づいた。先生のご指摘どおり、行き詰まりを感じていた。小レポートとしては、経済基盤の欠如を語り、大平宿というのは成り立たないという結論を持ってきても形としてはまとまるだろう。自分の中でも、最終レポートの内容はそうにしようと考えていた。しかし、十二月の中間報告で先生にご指摘されたように小さくまとまりすぎてしまうと、これから先へと生きてこないレポートになってしまう。そこで、大平保存運動へ視点を移してみた。夏季レポートの中でも、保存運動に関しては簡単に紹介していた。保存運動へ視点を移すことは簡単だったが、提出まで一ヶ月を切っていたため、十分にできたとはいえなかった。大平宿の保存運動は想像以上に規模が大きく、活動自体も活発に進められている。さらに、保存運動に関しての文献および、報告書は存在している。僕自身、保存運動をレポートのテーマにするに当たって、具体的な内容はどうすべきかという大きな問題点も出てきた。財団法人・観光資源財団のまとめた大平宿保存運動に関する調査報告書「信州飯田・大平の集落 集団移住した歴史的集落の保存と再生」には大平宿の歴史の記述から始まって、大平の自然条件、社会条件、集落と民家についての現況報告、保存運動の意義や詳細な保存計画が様々な視点から記述されている。レポートの内容が亜流にならないためには文献調査だけでなく、実際に活動に加わるべきと思う。幸い、観光資源財団がまとめた報告書とい

うのもまた、二十年以上前に出版されて以来、改訂版は出ていない。いま、現在進行形の保存運動とその実態をまずは体験することから始めていきたいと思う。年未年始は僕自身も、「大平宿をのこす会」の方も多忙であったため、研究は発展しなかった。「大平宿をのこす会」では保存活動は主に春から夏にかけて行われるため、実際に大平に出向くのは早くて五月頃になる。

今後の課題としては、まず、大平宿と同じように過疎化をたどり集団移住をした集落、主に街道沿いの宿場町、を列挙し、保存運動がどのように展開されているかを学び、それを参考にしながら大平の保存運動を考えていきたいと思う。例として、会津西街道の宿場町として栄え、過疎化とともに衰退していった大内宿があげられる。大内宿では観光地活用としての保存運動が繰り広げられている。旅行代理店と提携し、大型観光バスの誘致や道路整備などがなされている。このほか、似たような例はたくさんあり、保存活動の様相は多種多様であるとされている。大平宿保存運動発展の手がかりになればと思う。

その他にも、「大平宿をのこす会」の活動への参加や、主催イベントに参加するなどして文献上だけでなく、身近に大平宿を感じることも積極的にしていきたいと思う。

後期中間発表の際に先生からの指摘を受けてのレポート内容の方向転換をしたため、十分な内容にはいたらなかったことを反省であると同時に次への目標でもある。

#### 参考文献

大平史 発行者・飯田市 昭和 46 年 1 月 飯田市立中央図書館蔵

シリーズ・町並み保存運動の展開 3 大平宿保存運動のあゆみ  
発行者・大平をのこす会 昭和 61 年 7 月 飯田市立中央図書館蔵

長野県飯田市 大平宿・山奥に無住の古集落～その再生への道  
日本大学理工学部建築学科 吉田桂二 著  
店舗と建築 第十五号 抜刷 発行年月日不明 飯田市立中央図書館蔵

ルポルタージュ写真集 集団移住 ～大平とその人たち～  
日本報道写真連盟飯田支部 昭和 47 年 1 月 飯田市立中央図書館蔵

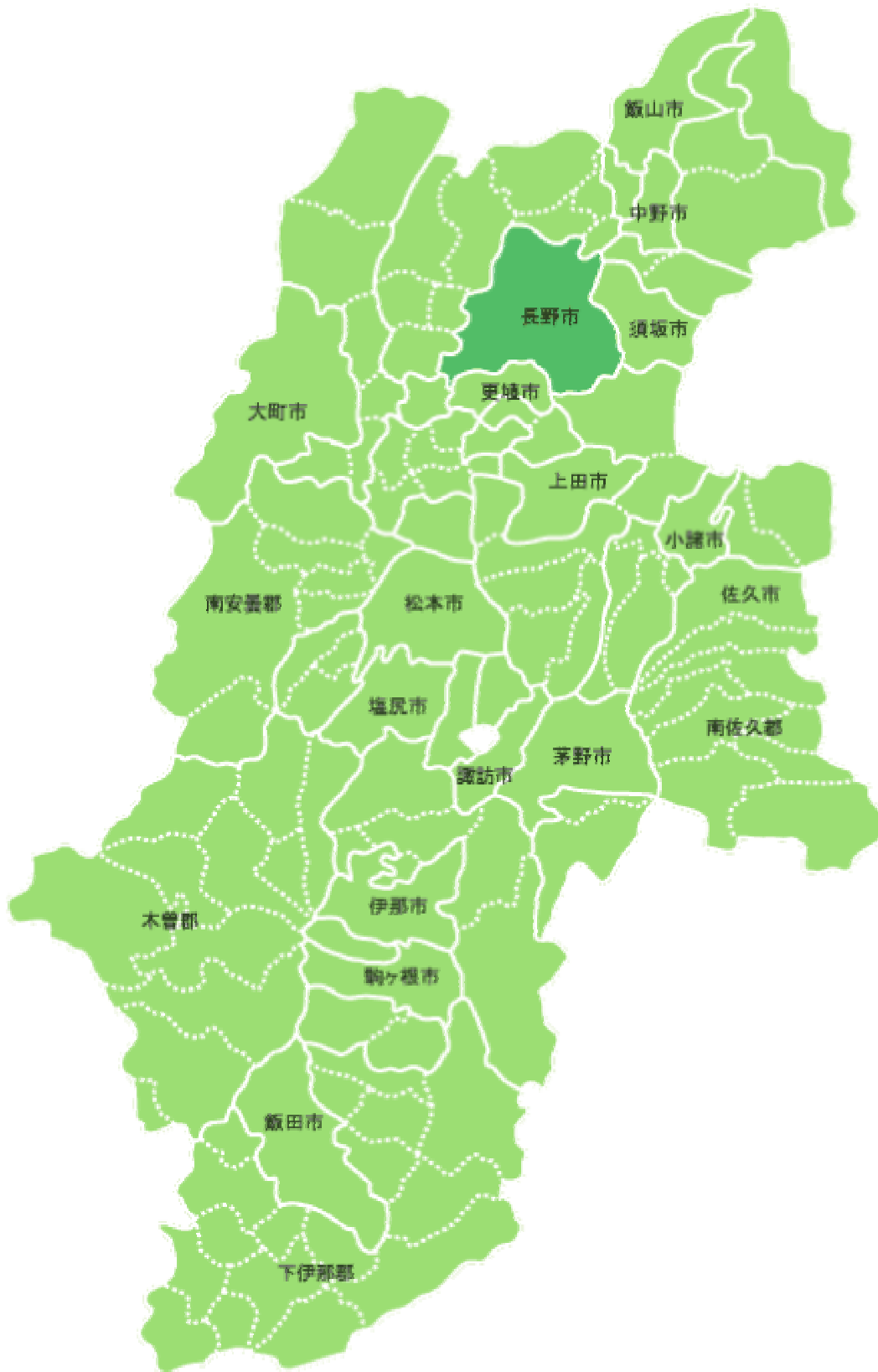
大平の民俗 集団移住した飯田市大平部落  
飯田市教育委員会 昭和 47 年 11 月 30 日 早稲田大学中央図書館研究書庫

真正・大平宿保存運動素描  
羅赤嶺会発行 羅赤嶺 6 1989/12/20 P38～P55 より抜粋 飯田市立中央図書館蔵



観光資源財団調査報告書 VOL.9 信州飯田・大平宿の集落 集団移住した歴史的集落の保存と再生 財団法人 観光資源保護財団 昭和五十六年三月一日発行 飯田市立中央図書館蔵

資料1 長野県地図



資料 2 大平宿周辺の地図

地図中央に摺古木山の下にある、R256にもR153にも属していない道が大平街道であり大平宿は大平街道沿い、摺古木山の麓の大平高原にある。

